阪神・淡路大震災慰霊と復興のモニュメント（芦屋公園内）

高浜三代句碑（月若公園内）

その未明我が家も焼けぬ原爆忌

戦争を経験した稲畑さん。最近の世界情勢などを観ていると、また戦争が起きる時代が来るのではないかと危惧されている。この句は戦時中に住んでいた芦屋の自宅が焼夷弾で焼け、街の惨たんたる状態を目の当たりにしたときに作った俳句。

「私は戦争を経験した者として『戦争は絶対にしてはいけない』と思っています。戦争を知らない世代になり、これからまた戦争をする時代が来ないか心配をしています。みんな幸せに平和に過ごしてほしい。広島に原爆が落ちた朝の未明、芦屋にもB29が飛んできて焼夷弾をいっぱい落としていった。月若町の私の自宅も全焼しました。目の前に焼夷弾が落ちてきたことは、未だに鮮明に覚えています。でも、その時は逃げることに必死で、不思議と怖い気持ちは湧きませんでした。『一緒に逃げよう』と妹と弟の手をひいて、芦屋川にあった暗所へ逃げ込みました。後世へ戦争の悲惨さを伝えるためにも残しておかなければいけないと思い作りました。」

今日何も 彼もなにもかも 春らしく

これまで稲畑さんが作った数多くの俳句の中から、一番心に残っている句をききました。

「18歳の頃だったかしら。春の暖かい日に外に出ていて、気持ちがいいなぁと思っていたら浮かんできて。すぐに、はがきに書いて祖父・高浜虚子が選者を務める朝日俳壇へ投句すると入選してね。この句を見ると、若かりし頃になんでもない日常を詠んだその時の記憶がぜんぶ蘇るの。だからこの句が一番好き。私は俳句を作ることによって、人生を生きてきました。いい思い出がある時はいい句ができ、辛い時には辛い句ができる。その時の心の状態で、俳句は残されていく。句を読み返せばその時のことが蘇ってくるのです。」

幸せな 命守りて 去年今年

インタビューの最後に、新年を迎えるにあたって稲畑さんへ一句お願いしてみました。

「そんな急に言われても、前もって言ってちょうだいよ」（笑）と叱られつつも、すこし沈黙のあと手帳にさらさらと綴り優しい笑顔と共に頂いた俳句。

「俳句は短い詩でしょ。完全に説明ができないから、受け取る人によっても捉え方が変わる。去年今年はお正月の季題。幸せは人それぞれ、置かれている状況や境遇により、感じ方は異なりますが大切な命。生きていることに感謝して、自分の感じ方次第でみんな幸せになります。年のはじめに幸せな俳句を見ると気持ちがいいでしょう。私は昭和10年に鎌倉から引っ越してきてからずっと芦屋の住人です。芦屋は風光明媚で北に六甲山、南に大阪湾のすばらしい環境。春夏秋冬の移りゆく姿のなかで俳句を作っていると、ここは本当に素晴らしい所だと思います。ここで命の最後までいられたらいいなと思いますね。皆さんも、楽しんで俳句を作ってみてください。芦屋は俳句を作るのにぴったりな場所です。毎月第１土曜日には、ラポルテホールで俳句会※を開催しています。俳句が好きな人なら誰でもウェルカムですよ。」（笑）

※俳句会（芦屋ホトトギス会）についての詳細は虚子記念文学館へ

虚子記念文学館

平成12年稲畑汀子さんが平田町に開館。俳人・高浜虚子の資料、俳句作品や著書などのほか、正岡子規や夏目漱石ら文人との交流を示す書簡も所蔵し、虚子と俳句に関する常設展示や企画展示を開催しています。

高浜虚子・正岡子規の作品や著書などがずらりと並ぶ

明治30年創刊「ホトゝギス」第一号

子規を囲む句会の様子

■開館時間　午前10時～午後５時（入館は午後４時30分まで）
■休 館 日　月曜日・祝日・替休日の翌日・年末年始
■入 場 料　一般500円／ 18歳以下300円／団体（一般20人以上）400円
各種障がい者手帳をお持ちの人と付き添いの人250円

問い合わせ　虚子記念文学館　☎21-1036（〒659-0074 平田町8-22）